



会長 宮 治 誠

(平成5～6年度)

会長就任にあたって

この度、日本菌学会会員各位の御推挙により第20期会長（1993年4月～1995年3月）に就任することとなりました。諸先輩が築いてきた、この伝統ある学会をいかに維持運営し、発展させていくか、その使命の重大さに身の引き締まる思いを致しております。日本菌学会は1956年に50名余の会員をもってスタートし、現在、会員は1400名余を擁する、生物系としては小さからぬ学会へと成長してきました。しかしながら、20期という節目をむかえ、本学会は生物学の一翼を担う学会として飛躍、言い替えれば脱皮の時期をむかえていると思います。

私は昭和38年千葉大学医学部を卒業、1年間のインターンを経て、病原真菌を研究するため皮膚科学の大学院に入学しました。医真菌学の勉強をはじめてまもなく感じたことは、同じ微生物系でありながら菌学会は細菌学会、ウィルス学会と異なりきわめて閉鎖的であったことで

す。今から考えれば、当時千葉大学医学部にはカビの研究者がまったくおらず、ひとりで研究をはじめた若者の気持ちが反映しており、閉鎖的というより他の微生物研究とは共通項の少ない、むしろ植物学、博物学に近い独自の研究領域に手も足もでなかった、というところでしょうか。

省みれば、19世紀後半、細菌学はロベルト・コッホとルイ・パスツールの登場により近代科学の先駆けとして、その幕開けを華々しく迎えました。その後、細菌学は医学の領域を踏み越え、他研究領域に広がり、生物学の一翼として大発展しています。半世紀おくれてウィルス学は、ウェンデル・スタンレイによるタバコモザイク・ウィルスの結晶化の成功により、分子生物学の主流のひとつに発展しています。それに比べ、菌学はそれ自体の研究は深まり進んでいきましたが、他の研究分野に強いインパクトを与えたり、新しい研究分野の源流となることが少なかったように思います。それではこの間、菌学分野に画期的な発見がなかったのでしょうか？ そんなことはありません。そのひとつは1928年のアレキサンダー・フレミングによるペニシリンの発見です。しかしながら、菌学が普遍的な生物科学として発展したかも知れないこの千載一遇のチャンスを菌学者は生かしきれなかったように思います。確かに物取りの材料としての菌類は周知されましたが、生物学的な深まり、極まりは十分とはいえなかったのではないのでしょうか。しかしながら、菌類は単純な構造からなる真核生物でライフサイクルに長い単相を持つ特徴から、近年、モデル生物として細胞学、遺伝学などの絶好の材料として取り上げられています。今や我々菌学者自身が菌類のシステムテイクス、生態学、生理学、生化学、代謝学、分子生物学、遺伝学、育種学などを極める時代であります。もちろん、このためには他の学問領域の研究者とその成果の助けを借りなければなりません。菌類研究の深化、生物学としての普遍化は我国においては本学会会員が主体でなければならないはずで

す。会長として今後2年の間に、菌学会のために何ができるのか？ 私の役割は、現在噴火口の直下まで突き上げてきたマグマのごとき会員諸氏の活力を解き放つべく、噴火口に穴をあけてこのマグマを広い世界に開放することであると信じております。その実行のひとつとして、本年12月2日（木）、3日（金）の両日、第1回日本菌学会国際シンポジウムを千葉県立中央博物館にて開催すべく起案中です。もうひとつは日本菌学会会報を国際誌に発展させたいと希望しております。いずれも容易では有りません。私の任期中にできるかどうか分かりません。しかしながら、私は努力してみるつもりです。いろいろ御異論、私が菌学会の歴史に不案内なため御不満な点多々生じてくると存じますが、座して待っている訳にはいきません。菌学会会員各位の御協力、御支援のほど、切にお願い申し上げます。